

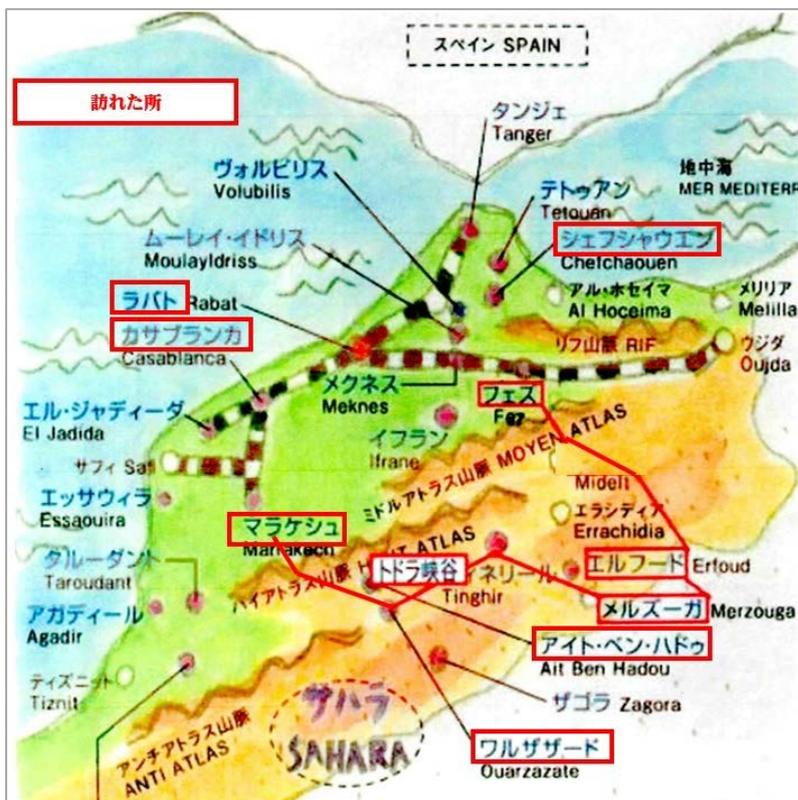
神奈川ウォーキングクラブ

モロッコの旅 記録

出発日：2018年2月20日(火)

帰着日：2018年2月27日(火)

参加者／吉越 熊坂 高橋文 熊島 伊藤美 山川 橋本 長谷川征・慶



この記録は日にちごとに
担当を決め書きました。

第1・2日目 2月20日(火)・21日(水)

～～成田出発からシャウエンまで～～

2月20日火曜日、成田空港第1ターミナルビル4階北ウイングGカウンターに9時5分集合。先に着いた人から添乗員の武田さんに細かい説明を頂き、順次搭乗手続きを済ませ、出発ロビーで待つこと約1.5時間。11時過ぎにいよいよ空路で経由地のパリへ向け13時間前後の予定で出発。久しぶりのやや長い外国旅行に期待しながらもエコノミー症候群が心配でした。幸い事前に行った機内用足置きとエアークッションが助けてくれ、予想よりも楽に過ごせ何よりでした。機内備え付けの種類豊富なDVD観賞も長い時間を忘れるのに役立ちました。パリへ着くまでに機内食が3回も出たので、パリ以後はないだろうと思ったら、何と1回出てきました。時差の関係なのか？よく分からないが1日に4回も食べたことは確かだなどと不思議な面持ちも…さすがに後半は食傷気味でした。アルコール他飲み物も飲み放題で、皆さん思い思いに喉を潤していました。この後はすぐ眠りに落ちる人、再びDVD観賞する人、数独？をする人、いろいろでした。途中窓側のBさんより山々の尾根が雪に覆われていることや氷河が広範囲に続いていること等教えて頂き、目を凝らして眺める場面もあり、結構楽しく過ごすことが出来ました。パリのシャルル・ド・ゴール空港からモロッコのカサブランカ空港へは3時間弱で着き、バスでホテルへ直行、明日からはモロッコ観光を大いに楽しむぞとの思いで気持ちよく就寝に至りました。

第2日目。スーツケースをドアの外に出し、6時過ぎに1階の朝食場所へ。パンなどおいしく頂き、食後、7時に首都ラバトへ向けて約91kmをバスで移動開始。我々と随行してくれる現地ガイドのアブドゥーさん、ドライバーのやはりアブドゥーさん、サポーターのハッサンさんが武田さんから紹介され皆で拍手を送りました。この拍手は毎朝続くことになります。到着後、早速世界遺産ハッサンの塔やムハンマド5世廟の観光を。アブドゥーさんの説明がよく聞こえるようにと、予め配られた受信機使用もここからスタートしました。



【ハッサンの塔】

ハッサンの塔とは1195年ヤークブ・アル・マンスール王様が建てようとしたモスク(イブンハサン)のミナレット(モスクの塔)だそうです。しかしながら、途中で王様が亡くなったので建設が止まり、88mの予定が半分の44mで止まったとか。この塔はラバトで一番有名な観光場所で、近くにムハンマド5世(現在の王様の祖父)のお墓があるとのことで、建物の中に入り、写真も自由に撮ることが出来ました。緻密で広範囲な模様を目の辺りにし、その素晴らしさを堪能する思いで

した。ある資料に、『ムハンマド5世は、20世紀後半からフランスやスペインの植民地となっていたモロッコを1956年の独立に導いた王様で、1973年に建てられた霊廟にはその偉大なる王の魂が眠っており、ステンドグラスが美しい天井を持つ廟内は絢爛かつ厳かな趣。』とあり、霊廟設置



【騎馬兵】



【ムハンマド5世廟の天井】

の理由に頷きました。

ラバト観光の後は、最も楽しい観光地の一つである青い街シャウエン観光です。またバスに乗り、約239km走行後到着の予定。長い道のりですが、車窓からの異次元？の眺めで退屈せず乗り切ることが出来ました。初めてのアフリカ大陸への上陸は何もかもが珍しく、久しぶりにカルチャーショックという言葉が浮かびました。イスラム教の国ということで、女の人は布で頭や顔を覆っていて、目だけが見えていました。でも、全行程を振り返ってみると、必ずしも一定ではなく、顔が見える人も増えた気がしました。時々、カフェの外のテーブルを囲み、語らっている人々が目に入りましたが、よく見ると、見事に全員が男の人です。あまりにも不思議でしたが、女の人は家にいるとのこと。家事や他の仕事で明け暮れている日々なのか、何てこと！男女差別ではないかという気分になった瞬間も。でも、これは誤解でした。帰国後に調べてみると、かえって家では、女の人の立場が強いからなのだそうです。妻達の井戸端会議で居場所がないことも一因とか。へえ～。イスラムは女性優遇の制度とも書かれており、何が何だか・・・深追いは止めました。

もう一つ吃驚したことは、カサブランカを出発した頃から道路の両側に夥しいごみが散乱し果てしなく続いたこと。ここはゴミの国か！と心の声が…。ゴミをそこここにも無造作に捨てても特に何も感じない国民性なの？とまた自問自答。そのうち、そうなら仕方ない、気にするのはよそうと、その他の景色を楽しみました。でも、やはり全行程を振り返ると、広大な自然の素晴らしい眺めが広がるほどにゴミは減り、気がついたらゴミの国ではなくなっていました。



(空も青、街も奥まで青！)

そうこうしているうちに、やっと見えてきたシャウエンの街。初めのうちは、丘の方に青の色が点在していたので、イメージと違うぞと思ったのですが、バスを降りて歩く程に期待通りの美しい青一色の世界が目飛び込んできました。



アブドゥーさんに案内された迷路みたいな路地の前後左右の光景はファンタジックで、絵本の世界のようでした。暫く夢のような青い世界を堪能しながらも、路地の

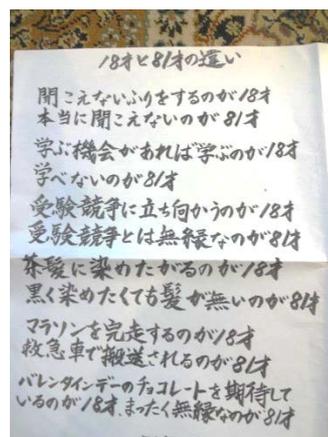
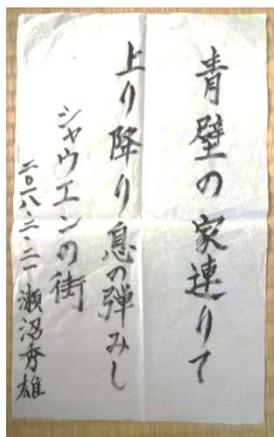
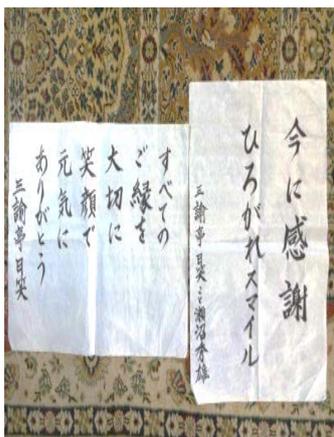
両側で小物や果物、革製品などを売ってお店の品々にも目を見張る自分がありました。途中「模型かと思った。」とのBさんの声に振り返ると、あまりにも大きい大量の苺が数十センチもきれいに積み上がっています。気候風土に合わせて成長も凄いのでしょうか。この後やはり青のイメージ豊かなレストランで昼食。久しぶりの魚が美味しく、苺入りの濃厚ジュースも飲み干し、爽やかでした。



食後、短時間ですが近くを散策してよいということで、またまた青に染まる空間を早足で散策。記念に名刺サイズの素敵な写真入りマグネットを買い、急ぎ足で戻りました。いろいろな空間が爽やかなブルーシティ、シェフシャウエンでした。 シャウエン観光の後は、宿泊地のフェズに向け、約230kmの道のりをやはりひたすらバス移動です。一日目で日本の約5分の1周分を移動したので、今更ながらモロッコの広さを感じました。翌日は出発がゆっくりなのでよく眠れました。



~~~~~  
道中、kwcのメンバーとも楽しい会話を交わすようになった方のお一人、元高校の先生S・Hさんが下のような句を寄せて下さいましたが、この他にもいろいろ！とても愉快な方で、皆さんよく笑っていました。



(ここまで 文・写真：山川)

### 感想：橋本 満喫したモロッコ旅行

モロッコ2日目はお天気に恵まれ、青い街のシャウエン観光予定。どんな街並か楽しみに心が少しざわつく。バスの中からシャウエンの街の全貌が見えた。それ程青くは思わなかったが、バスで下り坂をくねくね回り目的地に着いた。街に一步一步と進むとメルヘンの中に入り込むような紺碧の色に溜息をついた。建物の所々が青く塗られている。路地に入り込む。又思わずはっとし、美しい風景の中に現地の人びとの暮らしが垣間見える魅力的な街並みでした。ここで昼食をいただき、最後にデザート果物でしたが、バナナもリンゴもそのままの籠盛りでびっくり、皆さんお持ちかえりです。食事をした家の屋上に上がりシャウエンの街を眺める。それはそれは息を呑む光景が見られました。堪能した青いシャウエンの街並でした。

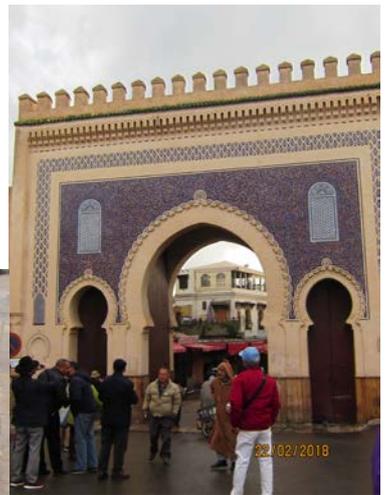
### 第3日目 2018年2月22日(木) フェズ in Morocco

モロッコ滞在2日目の朝、早朝3時頃迄通りは騒がしく、人の声が絶えない。ドンドンという太鼓の音もその頃迄続き、果ては鶏のときの声が何処からとも無く聞こえて来た。



昨夜からの雨も止み、予定通りバスは出発。モロッコ世界遺産の一つフェズ旧市街地観光へ。15 kmにも及ぶ城壁に囲まれたフェズ・エル・ジェディド地区の王宮のブロンズの門を見学、そこからバルコニーがあるユダヤ人居住区を通り、迷路に入り込んだ。

メディナの人々を養う食材や生活雑貨が所狭しと売られている中をはぐれないように、ひたすらついていくと、メディナの入口にあるフェズ最大の門ブー・ジュールド門に出た。外面、内面とも幾何学模様彫刻を施し、青色や緑色のタイルで彩られていた。入口でサボテンの実というのが売られていた。また迷路に入り、ブーイナニア神学校を垣間見て、その辺りで金銀細工のお見せに立ち寄った。値段は交渉次第でお好みのお土産を手に入れた方もおられた。



そこからまた細い路地を抜けて、バスに乗り南の砦に向かった。フェズの街が一望に見渡せた。全体を俯瞰後、またバスに乗りメディナに戻り、ロバが通る細い路地を歩き、多くの店を覗き、今迄とは違ったきれいな作りのメディナを通り抜け、



そこは高級そうな店が並び、中でも珍しく男性結婚衣装が飾られていた。モスクを横目に見て、次はタンネリショ



ワラの見学をする。昔ながらのなめし皮染色職人街。屋上より作業風景を見る。冬という事も



あり、あたりには鼻を突くような匂いは無かったのがよかった。屋上から降りるとそこは皮製品が山と積まれたお店。お目当てのバブーシュを必至に探し、ここでも値段交渉をして手に入っていた。

私はラクダ皮製のスツールに大枚を



はたき購入した。

路地をぬけ、そこに現れたのは吹き抜けになった広い庭で大邸宅のようだったが、レストランだと言う。モロッコ特有の大理石の装飾が施され、壁面、天井、柱、床など何処もかしこも幾何学模様が施されている。大きな丸テーブルには白いテーブルクロスが掛けられていた。出て来た料理も今迄で最高かな？と思う位な前菜はブリワット（春巻きのような物だが味は甘い）、メインはモロッコ料理タジン鍋が初めて、お見栄。中身は鶏肉のオリーブ添え。熊坂さんご持参の柚胡椒や柚ポン酢が、威力を発揮し、味を引き立たせていた。デザートはオレンジとバナナ、オレンジは甘くてジューシーだった。

中身の濃いフェズの見学を終えて、次の目的地イフレンに向かった。アトラス山脈の中腹にある



イフレンは、モロッコのスイスと言われており、大学や瀟洒な建物が建ち並んでいた。標高 1650 m、雪があちこちに残っていた。トイレ休憩をして次なる目的地エルフー

ドへ 395 km のバスの移動が始まった。途中、山には雪が多く残っており、スキー場も見かけ。1907 m の峠を越えて夕闇迫る頃、ホテルエルフードリアドに無事到着した。辺り一面砂漠のような雰囲気。我が部屋のお風呂の湯はさびたような、赤茶けて湯が出て来た。夕食はバイキング、種類は今迄よりは多い感じだ。

明日はとうとうメルズーガ、砂に埋もれる大砂丘にであえらると思うと胸がワクワクし、床についた。

今日は慶子の誕生日だった。フェズのモロカンハウスリヤドでのランチの時、皆におめでとうと言われ、あと何年生きられるか分からないが、生涯忘れられない誕生日となった。

征利・慶子記



ガイド・武田ミカさんから誕生日プレゼントをいただきました。

## 第4日目 2月23日(金) 晴れ メルズー大砂丘見学～トドラ溪谷観光

記録：高橋 熊坂

**高橋：**未明の5時、4WD トヨタのランドクルーザーに分乗してサハラ砂漠のメルズーガ砂丘に日の出を觀にホテルを出発。信号が一つもない真っ暗な道路を100kmのスピードで突っ走る、一寸怖い感じ。しばらくして砂漠の入口に到着、そこからは道路のない砂礫の原野です。4WD が本領發揮してまた突っ走る。やがて砂丘入口に到着。日の出



觀賞場所まで行くのには4WD でも無理。サラサラとした砂丘で車は入れない。ラクダに乗るか徒歩で進むかどちらかになる。私は徒歩隊に入り、觀賞地点の丘を目指して歩き出しました。

砂丘を登ったり降りたり歩くスピードが速い。砂があまりにもサラサラしており歩きづらい。懐中電灯を持っているとはいえ足元は不安定、先頭から遅れる人が続出してきた。先頭の案内人にもう少しゆっくりやってくれと要請したところ、ゆっくりだと自分の足がうずまってしまうから駄目だとのこと。遅れ人には処々で待つ方法を探るとのこと、数回の待機作戦がとられ何とか觀賞地点の丘に全員到着、そこで日の出を待つ。寒い、足踏みをしながら天を仰ぐ、満点の星空、近年稀に見る景観です。こんな空があったのかという感じです。やがて砂丘の向こうから太陽が顔を出してきた。何となく頭を垂れました。



砂丘を登ったり降りたり歩くスピードが速い。砂があまりにもサラサラしており歩きづらい。懐中電灯を持っているとはいえ足元は不安定、先頭から遅れる人が続出してきた。先頭の案内人にもう少しゆっくりやってくれと要請したところ、ゆっくりだと自分の足が



吊られてしまった熊島さん  
ラクダのガイドさんが撮影

**熊坂：**私はラクダに乗ることにしました。私は最後の方に乗ったのに現地の人に呼ばれてラクダに乗ると何と先頭のラクダでした。

2頭から4頭のラクダが繋がれて出発です。生まれて初めて乗ったラクダは乗り心地が良いとは思えませんが直ぐに慣れました。



盛上っています！



はい、ポーズ ラクダのガイドさんの演出

♪月の砂漠をはるばると～ 王女様になった気分に乗っていると到着したようです。ラクダはとても大人しく降りてから再び乗るまでじっとしゃがんで待っていてくれました。暫く待っていると段々空が明るくなってきました。いよいよ日の出です。雲一つない素晴らしい日の出を見ることが出来ました。

日の出観賞はここまでではありません。ラクダを引いてくれたベルベル人のお兄さんたちが頭にストールを被せてくれたり写真を撮ってくれたりしてくれました。お兄さんたちはとても剽軽でサービス精神旺盛でした。とっても楽しい時間でした。

### 満開のアーモンドの白い花

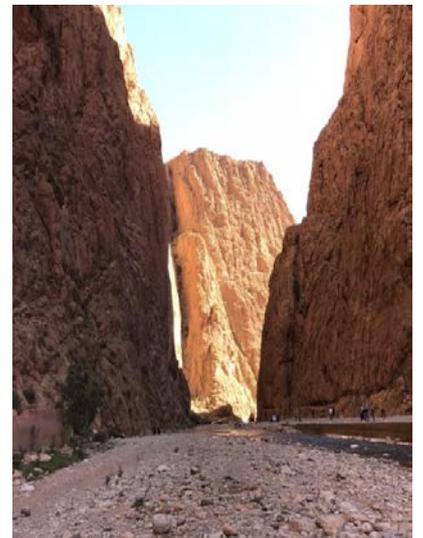


ホテルに戻り朝食後はバスでカスバ街道をトドラ溪谷に向かいます。カスバ街道は見渡す限り石の砂漠でラクダやロバが食べるイネ科の草が所々に生えているだけで遠くに草木の無い小山が連なっています。数十キロ毎にオアシスがあって村や町が出来ています。オアシスにはナツメヤシ、オリーブ、ウチワサボテン、アーモンドなどが植わっていてアーモンドはちょうど白い桜の様な花が満開でした。



**高橋：**トドラ溪谷は高さ150mぐらいの垂直に切り立った岩の間に清流が流れており、誠に綺麗な景観でした。どうしてこのような地形が誕生したのか不思議に思います。今晚のホテルまではまた170kmの移動です。遠いアルプスの雪景色をウツラウツラと見ながら車中を過ごしました。

今回の旅行は全日程トータルするとバスによる移動距離が約1800kmとなり、青森から本州を縦断したぐらいの距離となりました。



アトラス山脈

## 第5日目 2月24日(土) 2つの世界遺産へ アイト・ベン・ハッドゥの集落とマケラッシュ旧市街観光

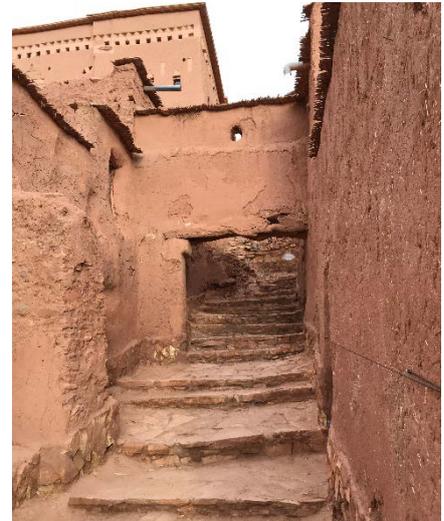
### 記録と感想：熊島

ホテルの設備は相変わらず「いい加減」で、モーニングコールは鳴らない。しかし朝食に遅れる人はいなかった。ワルザザードのホテルを7時30分出発、峠でアイト・ベン・ハッドゥの集落写真撮影のために下車、「塩の川」は近代的な橋ができたため簡単に入村できた。藁、泥、石で作った壁はデザインが素敵。壁の穴は小鳥の家に。上に登りベルベル人があぶり出し絵を描いているのを見た、見事です。

昼食はクスクス、現地人は手で食べる。昔は各家庭で作ったが今は袋詰めして売っている。サラダも美味しいらしい。

マケラッシュは土が赤いので「赤の町」と言う。ベルベル人の後姿を見る。マジヨレル庭園には世界中から集められたサボテン(サボテンの実実はフカフカしたスイカの種みたい)があった。イブ・サンローランの店もある。町はモダンな観光地で緑豊かだった。死者の集まる町ジャマエル・フナ広場では、魔除けの入れ墨屋さんがいた。

夜/ホテルによっては宗教的な理由でアルコールは置いていない。この日は、添乗員とガイドさんの計らいで、スーパーに立ち寄りワインを購入、一人10デルハムの持込料を支払い、ホテルでモロッコワインを楽しんだ。しかし、瓶がテーブルの上に置いてあると「下に置くように」と怒られた。



マジヨレルブルーが基調の庭園  
ヨーロッパの人々に人気

クスクス ベルベル人の伝統料理、  
スープをたっぷりかけていただきます。  
ご覧の通り  ~~X~~

火に炙るときれいな絵が・・・

このあとガイドさんが、「ホテルに問い合わせしたら夕食時のアルコールはありません」と発表。え～！！ 車内ザワツク。

### 記録と感想：吉越

### 砂漠に温泉？ アラビア語は右から書く！



世界遺産の「アイト・ベン・ハッドゥ集落」へ行く前日23日のホテルの浴槽の湯は、うす茶色で気持ちよく疲れがとれた感じ。温泉ではないかと思ったほどで、しょっぱかったと言う人もいた。

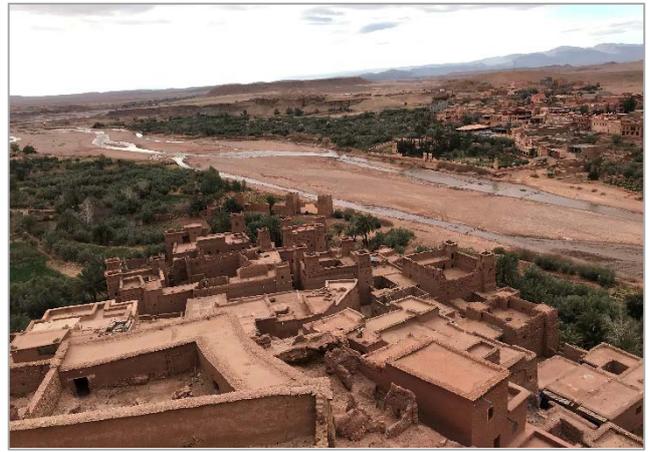
さて、本日24日は映画の町と言われているワルザザードを出発し、カスバ街道をひた走りアイト(家族)・ベン(同じ)・ハッドゥ(子孫たち)の集落へ向かいました。ヤシの木が多いオアシスを眺めながら「塩の川」を渡る時、岸边沿いに白い塩の塊がみえました。私はそこまで降りて行ってみたいのですが団体行動の為そうもいかず諦めました。そうだ、この茶色い塩の川の水はホテルのお風呂とつながっていない？

観光客にはフランス人も多くヨーロッパの近さを感じました。あぶり出しの絵にはアラビア語で yoshigoe と書いてもらったのですが、文字は右から左へ書くんだと知り、目からうろこ。

このあと2200mのテシュカ峠を越えるが、運転手さんとガイドさんは雪の心配をしていた。



見つけやすいラクダのバスと現地ガイド・アブドゥさん



アイト・ベン・ハッドウの集落から「塩の川」とオアシスを望む



『男はなあ、わら積んでなんぼの人生だ！』  
あ～道なき砂漠を今日も行く  
Who! リーゼント!

よく見た風景



俺の真似してんのかよ・・・

【モロッコを南北ふたつに分ける オート・アトラス山脈】  
標高 2260m のテシュカ峠を越えてマケラッシュヘ。雪で通行禁止になることもあり、運転手さんの最大の悩み。



マケラツシュの  
ジャマエル・フナ広場  
ヘビ使い、食べ物の屋台、水売り、曲芸師、自宅で作ったパンを売る人など、すごい喧噪。日本では見られない光景に圧倒された。



第6日目 2月25日(日) マケラッシュからカサブランカへ

記録と感想：熊島 カサブランカの思い出

最終日、グレードアップしたシェラトンホテルは最高、すべてに満足した。私たちツアーの約半数が宿泊した。夕食までたっぷり時間があるので、映画カサブランカに登場した「リックスカフェ」に行く予定だったが、町はゴミが散乱し治安が悪いということで取りやめた。昨日までのホテルはポットがなく温かい飲み物は縁無し、グレードアップの威力が発揮され各種の飲み物やアメニティグッズが完璧。一人が家から日本茶を持参したのでティーパーティを楽しんだ。さあ、明日は3時起床だ、最後の夜を惜しみつつ眠りについた。



バスの窓越しに「リックス カフェ」映画「カサブランカ」を体験できる場所。主人公「リック」の名前を取った、映画の中に出てくるバーをイメージして作られたレストラン。

【最終ランチはカサブランカで】  
海のそばなので、魚介類のフライ盛り合わせ 最高！  
タコ、イカなど日本に輸出している



旅のスタイル

モロッコで一番大きいモスク  
天井は自動開閉だそうです。  
シャシンヲ ドウゾ！  
(現地ガイド・アブドゥさんの合言葉)



今日のはんびりカサブランカ市内見学



モロッコで一番素晴らしいと感じた「ハッサン2世モスク」

アシスタントのハッサンと共に 後ろには大西洋の大海原



## 報告と感想：吉越 カサブランカは、映画をほうふつさせる霧の街

2月20日、カサブランカ空港に降り立った時、街は霧に包まれていた。映画「カサブランカ」の別れのシーンも霧に包まれていた。ああ～、あの時と同じだ！（といえども映画は1942年製作なので76年前 私はまだ生まれていなかった）カサブランカは港町、海岸線沿いなので朝晩の気温差があり霧がでるそうです。

映画「カサブランカ」では主人公リックのセリフと立ち回りのカッコ良さに圧倒された。イングリッド・バーグマンの美しさにも見とれてしまいました。旅券を手に入れるためカサブランカで待ち続け、ポルトガル・リスボンへ飛び立つ・・・。

戦争のない世界でなければと強く思ったモロッコの旅でした。なお、1月には会員の小山さんご夫妻もモロッコを旅され情報をいただきました。お礼申し上げます。



現地スタッフ  
ガイド アブドゥ  
運転手 アブドゥ  
アシスタント ハッサン  
右から  
アブドゥさん  
ハッサンさん

### 映画 カサブランカ



解説(ネットより)

ハンフリー・ボガートによる名台詞「君の瞳に乾杯」で知られる、映画史上屈指の名作。第2次世界大戦下の1941年、アメリカへ行くためには必ず通らなければならない寄港地だったフランス領モロッコのカサブランカ。そこで酒場を営むアメリカ人リック(ボガート)の元に、パリで突然消えてしまった恋人のイルザが、夫で反ナチス活動家のラズロを伴って現れる……。共演にイングリッド・バーグマン。監督はマイケル・カーティス。42年度のアカデミー賞では作品賞、監督賞、脚本賞の3部門で受賞した。

## モロッコ 私の1枚

よく働く子供たち



イチゴ売り



食肉店

驚きの光景



狭い路地 ラバを曳く



青い町 シャウエン

## 第7日目2月26日(月)～第8日目2月27日(火)モロッコより日本に帰る

カサブランカ、シェラトンホテル。早朝3:40時に全員にモーニングコール。ホテルのロビーで朝食用のお弁当をもらって、4:30時にバスでホテルを出発、ムハンマド5世国際空港へ。皆元気。5:15時空港着。晴れ。朝日が昇る。遅しいガイドさんとお別れ。チェックインの前に荷物を減らそうと朝食を済ませ、カサブランカ AF1497 便4分遅れの7:24時発パリ行き。機内食も出た。パリ、ドゴール空港10:18時着、3時間10分のフライトで、予定より少し早く着く。空港で集合写真を撮って、いよいよ最後の長いフライトへ。日本の方が風が強いとのことで、予定より20~30分遅れる見込みとのアナウンスがあり、13:35時発の予定が14:15時に出発。所要時間11時間50分の予定。機内で出された飲み物・食事をいただき、映画を見る人・本を読む人・良く食べおしゃべりする人などそれぞれに長い時間を過ごした。到着前に添乗員さんがアンケートを回収。第8日目2月27日(火)成田空港9:40時着。予定より15分遅れで済んだ。荷物を受け取り、皆元気で帰ったことに安心し、いろいろと気を配ってくれた代表の吉越さん他同行の皆に感謝して、各自帰宅の途へ。天気にも恵まれ、8日間のモロッコ旅行は、予定した全行程を実行でき、終了しました。

ふり返ってみると、モロッコは、大西洋側のカサブランカ・ラバト、地中海側のシャウエン、アトラス山脈やサハラ砂漠の入り口とオアシス、交易の中心マラケシュと、それぞれ異なった特色があり、一つの国としては変化の大きいとても興味深い見ごたえのある処でした。まず、カサブランカからラバトに向かう広大な平地・緑地に目を見張り、絵本に収めたいようなシャウエンの町、路地が入り組んだ迷路のようなフェズ、フェズからイフレン辺りの延々と続く雪化粧の美しい山々とジス川。拝みたくなるようなエルフィードのサハラ砂漠の眩い日の出、人の生きる知恵を感じるオアシスの町、地球の不思議と途方もない年月の歴史を思わせるトドラ渓谷、アラビアのロレンスなどの映画のロケ地ワルザザード、イヴサンローランの庭園で落ち着き、少々寝不足の頭よ目覚めよとばかりの交易都市マラケシュのマーケット広場の喧騒、カサブランカに戻ってから見た巨大なモスクは、美しく、イスラム建築の技術力の高さを見せつけられたが、この国の女性の姿とのギャップには、女性の私としては悲しさを覚える。東京の様に激しく変わる都市との時の流れの速さの違いなどに思いを巡らす。いずれにしても人が幸せに生きてほしいと願うが、日本に帰った時は、やはり私は、日本人、日本はいいなと改めて感じた旅でした。

伊藤 美奈子



写真/乗り継ぎの  
シャルルドゴール空港にて  
前列右から2番目はモロッコ  
を知り尽くした、添乗員の武  
田さん

2018.2.26 12:05